

【ポスターセッション】

大学生と地域社会との協働に基づく福祉実践の成果と課題

—大学生と地域社会との連携関係に注目して—

○ 南九州大学環境園芸学部 林 典生（会員番号 005404）

キーワード3つ：コンフリクト、福祉教育、キャンパスソーシャルワーク

1. 研究目的

演者は過疎化や高齢化をはじめとして様々な課題を抱えている地域に若い人材が入り、住民とともに地域の課題解決や地域おこし活動を実施している。これらの実践を通じて、若者に地域への理解を促し、地域で活躍する人材として育成することにつながる。こうした取り組みは、地域及び大学双方にメリットがあり、さらなる充実が望まれる。そのためにも、連携事例の収集・整理、そのノウハウの確立、継続的に実施できる仕組みが求められる。

そこで、本研究は以下の事例を対象に実施した高齢者系活動3本（特別養護老人ホーム入所者を対象にしたガーデニング活動、介護予防を目的とした高齢者サロン、高齢者デイサービス）、しょうがい児者系活動3本（障害者支援事業所の生活介護利用者を対象にしたガーデニング活動、放課後等デイサービス利用児童（小学生から高校生まで）を対象にしたガーデニング活動、複数の放課後等デイサービスおよび地域おこし団体との協働に基づくしょうがい児を対象にした野外活動）、子ども家庭系活動5本（児童健全育成を目指した放課後児童クラブ・児童館利用児童を対象にしたガーデニング活動、地域おこし団体による地域社会資源を活用した食農教育活動、地域住民と中学生との交流を目的としたコミュニティガーデン作成ワークショップ）、地域交流系活動2本（A市社会福祉協議会も含む福祉関連団体と大学生との協働によるボランティアフェスティバル、地域活性化を目的としたガーデニング活動）の合計13本の事例をまとめる中で、大学生と地域社会との連携関係を明らかにしていく中で、これらの連携関係に基づく福祉教育実践の成果と課題を探っていききたい。

2. 研究の視点および方法

演者は活動現場にて利用者や職員の要望や意見をヒヤリングやアンケート調査を実施して拾い上げていくと共に、相談しながらガーデニング活動を企画・運営を実施し、振り返りながら改善している。この流れの中で、当事者や職員等の意見交換しながら活動風景の写真や記録等の資料を整理し、場合によっては関係者の意見を聴きながら、活動における連携関係について図式化することを試みた。

3. 倫理的配慮

この研究は南九州大学倫理委員会に研究計画等について審査を実施して、了承が得られ

たものである。この研究は個人情報保護の視点から、学生、参加者および現場関係者などの関係者に説明を行い、了承が得られた場合のみ活動全体の写真撮影、活動に関する記録整理および関係者の皆様にアンケートやヒヤリングを実施した。

4. 研究結果

まず、ガーデニング活動参加者が学生との交流を通じて、積極的にかかわる姿を利用者や職員等の関係者が体験することにより、実践前に心配されていた職員の意識が変化して、積極的にかかわる発言や姿勢が見られることが明らかになった。特に、学生自身が話し合いながら独自の視点で考案、工夫した内容を利用者が積極的にかかわる姿を見る中で、利用者が肯定的な発言をされるとともに、職員からも同様の肯定的な発言をいただけることが明らかになった。また、学生もしょうがいの有無や年齢等を問わずに様々な人々と一緒に行うことで、勉強になったとの発言をいただくと共に、複数の学生が福祉の現場で働きたいとの意欲がわき、就職に結び付けた事例も見られた。なお、事前に活動現場に話をし、活動に携わりながら支援を行った学生もおられ、活動現場への理解をして頂く必要がある場面も見られた。

但し、課題として、地域との連携を進める為に地域社会と大学生との連携を進める為には、まず地域の団体や機関に学生に関する理解をして頂く必要があることが明らかになった。団体の上層部が大学生について理解されないまま、大学生に負担を与える発言を行うこと等で大学生が参加できなくなり、活動実践の継続が難しい事例が見られた。また、学生が活動現場との力関係上において注意することを遠慮する等の負担があり、大学生へのいたずらやふざける行為を行う子どもたちへの対応で苦慮する事例等が見られた。さらに、大学生同士や活動現場の職員同士および大学生と活動現場の連携が取れない場合に、利用者自身が不安になって活動の参加が維持できなくなるなどの混乱する場面が見られる等の事例が見られた。

5. 考察

上記の通りに、地域社会と大学生が関わる中でお互いにメリットがあることが明らかになった。今後は大学生について地域社会も理解したうえで、お互いに協力できる仕組みづくりを検討する必要があることが明らかになった。さらに、生活状況等の様々な背景を持つ大学生が存在する現状の中で、それらの背景を理解していただけないまま大学生に活動に関する協力をお願いするのは難しい状況である。そのためにも地域社会が大学生の事を理解していただいたうえで、協力できる方法を一緒に探る必要があることが明らかになった。例えば、職員と相談しながら、危険な場面を減らして、誰もが楽しめるガーデニング活動を実践していくとともに、大学生以外の地域在住の若者と連携するなどの多種多様な担い手を探していく必要がある。

最後は、この研究を行うにあたり、様々な関係者のご協力を頂くと共に、研究資金の一部は南九州学園研究奨励費にて実施しました。